ロンドン大学SOAS（東洋・アフリカ研究学院）図書館／IALS（高等司法研究所）図書館を利用して
―― 図書館司書の方々との想い出 ――

法学部　准教授　林　真貴子

2005年４月から2006年３月末まで近畿大学の援助を受けて、ロンドン大学SOAS（School of Oriental and African Studies）で研究に従事した。留学期間中にほとんど日課のように通った場所は、SOASの図書館、ロンドン大学IALS（Institute of Advanced Legal Studies）図書館、ロンドン大学本部（Senate House）図書館、法曹学院の一つであるInner Templeの図書館、そして国立公文書館（National Archives）と大英図書館（British Library）である。なんといっても想い出深い場所は留学先であるロンドン大学なので、SOASの図書館とIALSの図書館の話をしたい。

まずは、SOASから……SOASはロンドン大学連合のひとつで、大学本部のあるラッセルスクエアに存する。その名のとおり、英国におけるアジア・アフリカ研究の拠点であり、学部と大学院でアジア・アフリカのさまざまな地域の言語教育、政治・経済研究、比較法研究、美術・文学・歴史研究などなど幅広い地域研究をおこなっている。日本学科ももちろんヨーロッパにおける日本研究者にはよく知られた存在であり、図書館には非常に多くの日本関連蔵書がある。日本語で書かれた10万冊の書籍を所蔵し、また英語をはじめとする外国語で書かれた日本に関する文献を４万冊所蔵している（SOAS全体の蔵書数は100万冊を超える）。ヨーロッパでは最も日本関係の蔵書の多い大学のひとつである。日本・コリア部門の年間図書費は、継続雑誌や美術関係を除いて、４万ポンド（私が居たころは約800万円）である。地域研究の専門大学であるので、図書費はそれぞれの部署（国や地域別の部署、さらに美術部署、電子情報の部署もある）ごとに割り当てられ、専門のライブラリアンの裁量によって、書籍の購入がなされている。

SOAS図書館では、独自の図書分類方法を採用しており、国または地域による分類と主題（テーマ）による分類がクロスするようになっている。まず大まかに、国または地域によってフロアが決められ（たとえば日本とコリアに関する文献は、東南アジア諸国の文献とともに主にレベルBとレベルC（３階と４階）に存在する）、日本語で書かれた文献の記号はDとなり、ハングルで書かれた文献はDKとなるが、さらに朝鮮民主主義人民共和国の文献はDKN、大韓民国の文献はDKSとなっている。主題別の分類は、日本語で書かれたものは日本十進法で分類されており、一般000s、哲学100s、歴史200s、社会科学300s、自然科学400s、工学500s、工業・商業600s、美術・音楽700s、言語800s、文学900sとなっている。また、西欧の言語で書かれた日本に関する文献は、美術・音楽については同じく700sであるが、地理・歴史は900s、自然科学・数学は500s、言語400s、宗教200s……などDDC22で分類を行っている。このように、まず国／地域に分類し、その中での図書分類方法はそれぞれの地域ごとに最適の分類方法を採用している。ところが、図書館はすべて開架であり（貴重資料室をのぞいて）、かつ現地語で書かれた文献と西欧語で書かれた文献とをおなじ書架にならべることが基本方針であるために、分類上の苦労があるという。

日本関係ではアイヌに関するコレクションが有名であり、さらに日本の府県史・市史が非常によく収集されている。もし留学中に寂しくなったら、生まれ育った地域の市史を見

に行って、子供のころを思い出すことができる！法律関係についても、法令全書をはじめ、立法過程を調べるための議会記録・委員会記録、各省の日誌などの関係文書も充実していた。なお、SOASの図書館は、美術関係のコレクションに力を入れており、予算も書架も美術部署として別枠になっている。とくにインド美術に関するコレクションが有名である。

写真１：SOAS図書館

さて、このSOAS図書館には、日本・コリア文献担当として、ライブラリアン小林富士子氏が1995年から勤務している。彼女は、アメリカのインディアナ大学で図書館学の修士号を取得した専門のライブラリアンである。はじめて大学を訪れたときに、ある教授から「まずはFujikoに会いに行くと良い」といわれた。別の教授は「彼女がいないと研究ができない」というほど、学生や先生方から信頼されている。私が出席した日本研究のセミナーに彼女も出席していたことがある。なぜ、この授業を聴講するのですか？と聞いたところ、「学生や研究者の興味関心の動向を勉強するために……」という答え。彼女はSOASに勤め始めた12年前から現在まで韓国語の勉強を継続しているなど、常に専門のライブラリアンとして勉強し続けている。その姿勢に、仕事に対する自負を感じた。

さて、このように予算も潤沢にあって、セクションごとに専門のライブラリアンを置くような大学も、日本の大学と同様に転換期にあるとみえる。留学中に大学経営をめぐって二度の抗議行動があった。ひとつは英国全土で起きた大学教員のストであったが、もうひとつはSOASの図書館で日本・コリアセクションと中国セクションの専門ライブラリアン２名を解雇しようとする経営側に反対しての抗議行動であった。小林氏も剰員解雇の対象となり、実際に二ヶ月間の解雇となったが、教授と学生による抗議行動・教授たちによる経営側との交渉によって、二ヵ月後に復職した。専門ライブラリアンの将来について、彼女に話を聴く機会があった。

○林：日本の大学に勤務する者にとって、専門のライブラリアンがサブジェクトごとに配置されているような図書館は夢のような存在です。英国や米国のライブラリアンの状況を教えてください。

●小林氏：英国の大学では、ライブラリアンのもっている専門知識の必要性を認めながらも、コスト面を考えて、ライブラリアンを削減する方向のようです。アメリカでは、図書館のライブラリアンとなるには、MLSコース（日本の大学院修士課程相当）で、決められたカリキュラムを履修して必要単位を取得することが義務付けられていて、学位を取得していることが雇用される際の条件となります。博士号取得者も多いアメリカの方はまだ状況が良いのかもしれませんが、英国では経営の合理化の中で、非常に苦しい状況が未来には待ち受けているかもしれません。というのは、エレクトロニックリソース（電子資料情報）を扱うライブラリアンを重視し、レファレンスやサブジェクトのライブラリアンを軽視する傾向が見られるからです。

○実際に、昨年には解雇騒動もありましたが……。

●あのときに感じたことは、学生たちや教授たちなど実際に図書館を使う人々からはものすごく必要とされているのかな、ということでした。まさか教授たちがあそこまで努力して守ってくれるとは思いませんでした。私が勤めるかどうかはともかく、サブジェクトごとの専門ライブラリアンのポジションを守っ

ていかなければならないと思いました。毎日毎日、もっともっと勉強しなければならないと思っています。学ばなければならないことは山のようにあります。

○外国研究を行っていくうえで、専門のライブラリアンの働きは本当に重要だと思います。欧米の先進的な学問を支えているのは、そういった研究に対する層の厚い支援ですよね。

ところで、学生数も格段に増えていると思いますが、日本学科の状況はどうですか？

●現在は１学年に約60名の学生がいます。日本研究に対する「熱」は、経済分野の研究については弱くなってきたのかもしれませんが、日本の文化を学びたい、日本語を本格的に学びたいと思う熱心な学生たちは集まってきています。英国の大学は三年制なのですが、SOASは四年間かけて卒業（うち一年は日本の大学に留学）します。バブル崩壊により、日本の財団や企業からのファンドは減り、厳しい状況です……。けれども、学生たちは実に熱心に勉強していますね。

写真２：SOAS図書館閲覧スペース

この後は、日本での留学受入先大学を見つける苦労話から……先生方の噂話へと移っていきました（笑）。小林氏は、日本からのファンドや寄贈による図書館支援について、本来的にはロンドン大学の問題であるとされたが、私は海外における日本研究の質と量とを維持していくために、日本からの図書の寄贈などの積極的な支援が不可欠である、と思っている。SOASの日本関係図書に対する年間４万ポンドの予算は、欧州の大学の中では潤沢な方だけれども、アメリカの有名大学における日本研究には、その10倍の予算がついているという。知力とは国力のことか。

さて、私にとってもう一つ思い出深い場所、ロンドン大学IALSの図書館についてもお話ししたい。この図書館は、SOASと同じくラッセルスクエアに存し、ロンドン大学の中で、法学系の図書・雑誌をもっとも豊富に所蔵している。27万9000冊の図書と約3000種類の現在刊行されている雑誌を所蔵しており、エレクトロニック・リソースも充実している。これらが全て法学系の図書・雑誌であるということを考えると、その種類の豊富さに感動する。

写真３：法曹学院における試験の記録
（IALS図書館所蔵）

私は毎週水曜日に、この図書館の書庫に所蔵されているInns of Court（法曹学院；ロンドンにある弁護士（バリスタ）の自治組織であり、バリスタの養成を行なっている。現在はロンドンに四つある。）の入学記録・授業記録・試験記録等を閲覧するために通った。〔写真３〕書庫に所蔵されている資料は、アーキビストのミズ・ドォウソン（Ms. Elizabeth Dawson）が執務している閲覧室で閲覧をする。重々しい椅子と大きな木の机。重い大きな資料をめくってお目当ての人物を探していく。今回の研究目的のひとつは、1870年代に来日した英国人バリスタの英国内での経歴・活動記録を

調査することと、おなじく明治初期に渡英した日本人でバリスタの資格を取得した人たち（たとえば星亨や穂積陳重）の資料を調査することであった。彼らのインズ・オブ・コートにおける試験記録などを探すために通ったのである。英国人バリスタとしては、とくに滞日期間が三十年に及んだカークウッド（William Montague Hammett Kirkwood, 1850-1926）の資料収集に努めた。カークウッドは、インズ・オブ・コートにおいて筆記試験の受験が必修となる直前に弁護士資格を取得していたため、どうやらその試験記録が残されていないらしいということが分かったのであるが、その調査をしている過程で、彼の出生記録や結婚記録なども取り寄せたいと思い始めた。これらはむろんIALSに所蔵されていない資料である。これらの資料を探す過程でも、ミズ・ドォウソンには本当にお世話になり、いろいろなことを教えて頂いた。彼女の勤務日である毎週水曜日にIALSの図書館へ行き、５階にある執務室へ直行して、試験記録などの資料を閲覧しつつ、陰の目的－出生記録などの調査方法を教えてもらう等々－を果たしていた。

英国においては、個人の出生記録は1850年以降であれば、ほぼ全て閲覧可能である。従ってこれらは通常、とても容易なのだ。私も他のバリスタについては難なく探すことができたし、カークウッドの家族についてもすぐに見つけ出すことができた。しかし、どうしてもカークウッドの出生地と出生日は見つけることができなかった。家族の居住していた地域（デボンシャーのBidefordという地域のYeoValeという場所）の教区教会〔写真４〕へも行き、彼の家族の墓を見つけることはできたが、彼に関する情報は何もなかった。ミズ・ドォウソンの助言に従い、地元の資料館もたずね、そこでカークウッドの父親の時代の土地台帳や家の設計図〔写真５〕なども見つけたが、彼個人の出生に関する情報はなかった。ミズ・ドォウソンは、「あら、不思議、また彼は隠れたわねえ。う～ん、Mr.かくれんぼさん」と、調査が失敗に終わるたびに言った。50代後半であろうおばさまの、茶目っ気のある物言いとそのポッシュなしゃべり方が好きだった。

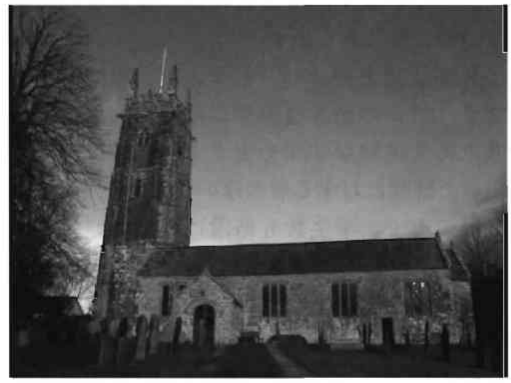
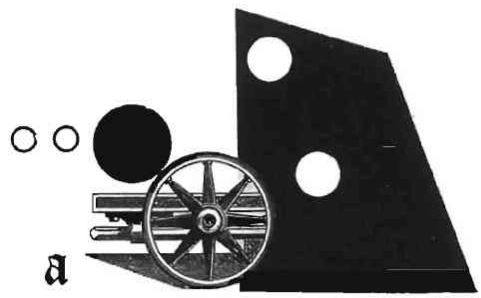
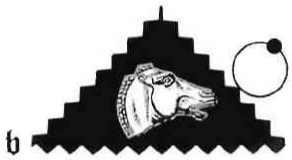


写真４：AlwingtonのSt.Andrew's教会

写真５：カークウッド家の土地台帳･設計図など
（North Devon Library and Record Office）

帰国日が迫ってきた２月下旬に、いつものように訪ねると、「みつけたわよ、たぶん」。ええ～どうやって？？　実はカークウッドについては、英国の国立公文書館でも調べ、そこのレファレンス専門職員にもいろいろ教えて頂いていたが、収穫はなかったので、半ば諦めていたのだ。彼女は自分の時間を使って調べてくれて、キリスト教系団体のインターネットサイトにアップされているデータベースから彼の出生記録を見つけ出した。私はすぐに、その団体の図書館へ行き、資料の閲覧と複写をお願いした。ところが、カークウッドの記録が載っていると思われるマイクロフィルムの巻は、現在アメリカにあるという（その団体の本部がアメリカなので）。もちろん、その場ですぐに手続をしたが、内心は帰国日

に間に合うかどうかどきどきしていた。無事に資料入手したとき、そしてそのコピーをもってミズ・ドォウソンの元を訪れたときの喜び！彼女は、定年後に第二の仕事として、自分の家族のルーツ・歴史を調べる人びとの手伝いをしたいと思っているので、今回のことは非常によい勉強になった、と言ってくれた。イギリスでは現在、自分の家族のルーツを調べることが大流行していて、国立公文書館を訪れると、２階の向かって右側の部屋には定年退職後の男女と思しき人びとが大勢いる。家族のルーツは、インターネット上でもかなりの程度まで調べることができ、一つの「産業」となっているようである。最後に、カークウッドが生まれた日と場所を記しておきたい。カークウッドは1850年３月22日にウェールズのCarmartheshire、Llandilofawrという場所で、父John Townsend Kirkwood（1814-1902,治安判事）と母Eleauora Elizabeth Morrison Hammett Kirkwood（1820-1861）のもとに四男として生まれた。

さて、夕方５時に図書館を出て、ロンドン大学本部の建物を通り抜け、裏門から大英博物館へ入り（ロンドンのほとんどの博物館・美術館には入館料がないので）、さっと展示物を見ながら正門へ出て、正門前にある古本屋さんに立ち寄り、歴史書を眺める。Quintoという、Charing Cross Roadに本店のある有名な古書店である。地域研究や歴史関係の本があり、地下には児童書などもあった。Quintoを出て、とても高いスターバックスのコーヒー（日本円にすると一杯500円ぐらいになる）を飲みたいなあと思って、ときどき実現する。このようにして図書館と司書さんたちにお世話になった留学生活であった。